



ユキオ・リピット氏インタビュー 宗達の「たらし込み」について

たらし込みは、墨の滲みや広がりを探求する絵画技法だ。現在では色絵の具を使って行うこともあるが、宗達の時代には、淡い墨に濃い墨をたらし込む技法のみだった。墨の濃さや水分量によって、滲み、かすれ、墨だまりなど様々な表情が生まれる。絵師がたらし込みの技法を駆使するには、装飾性や綿密な構図の探求に加え、きわめて精緻な技術が必要だ。この技法は時間性を伴う。まず淡い墨で描き、それが乾く前に、濃い墨を重ねて滲ませるのだ。あとから重ねる墨は、最初の墨色よりも濃くなければならない。濃墨が薄墨に滲んで混じり合いながら、時間とともにめくるめく変化を遂げ、絞り染めのようなむらが生まれる。油絵と異なり、一度描いたものを上から塗りつぶすことができないため、適当に描いたり、間違えたりする余地はない。前述したように偶然性を伴う技法だが、その偶然性さえも、墨と水の性質を理解した上で意図的に導き出すものだ。極めて高度な技法なのである。

《雲龍図屏風》の龍は、周囲の黒雲よりも薄い墨色を使い、かすかな輪郭線で描かれており、幽玄の空気をまとっている。おぼろげな姿が雲間に消えたり、また現れたりするかのようだ。眺めていると、三次元的な立体感というよりも、霧のようにつかみどころの無い無限の広がりを感じ、現実世界と見えない世界との境界で戯れるような感覚に包まれる。宗達はこうした表現を、筆運びのみではなく、巧みに墨を扱う技術によって生み出した。その卓越した技には驚嘆するほかない。私は《雲龍図屏風》を見ても、絵師がどのように絵筆を動かしたのか推測できない。龍が紙の上から現われ出てくる勢いを感じるのみだ。そうした感覚こそが、宗達の驚くべき技量を物語っているといえよう。

"Interview with Yukio Lippit." Hoaglund, Linda, dir. *Edo Avant Garde*. 2019; United States; Japan.
<https://www.edoavantgarde.com/> (ユキオ・リピット氏インタビュー 出典:リンダ・ホーグランド監督『江戸アバンギャルド』2019年 アメリカ・日本)



依屋宗達 《雲龍図屏風》(部分) 国立アジア美術館 フリーア・ギャラリー